

---

# 星のカービィ

十竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

星のカービィ

### 【Nコード】

N4933M

### 【作者名】

十竜

### 【あらすじ】

鏡の国。それは に支配され廃れた国となった。カービィたちは の目的を追い、鏡の国を、この世界を守るために行動する。ただ、一つの目的を探しながら。

## # 1 目覚め

ハア、ハア、

「どうした、これで終わりか？」

やつはささやいた。声はわずかに聞こえた程度だった。

「・・・そうか。なら大人しく捕まってもらおう」

まだだ・・・。

まだ、終わってない・・・。

「しつこいな・・・。次で終わらせるか」

やつの目は明るく輝いた。暗い空間で、静かに、白く。光は目に入り強く痛めつけた。あるときより、ずっと、ずっと強く、目を開くことができなかった。

「死ね」

くそっ

一瞬さらに強く光り輝いた目からまるでこの暗黒の全てを照らすかのように光線が放たれた。それは音よりも早く、僕を吹き飛ばした。光線は地面を砕き、石を撒き散らし、嵐のような衝撃波を作り出した。一時のすきも与えず僕を叩いた。傷だらけの体がさらに傷つけられ、既に血まみれになっていた。赤い液体はためらいもなく衝撃波に散らされた。

数秒たつと嵐はやんだ。全身から流れる血が、腕を伝い、足を伝い、地面に零れ落ちた。手も足も、もう動かせない。だが、瞼は少し動かした。少し目を開いた。しかし、かすんで何も見えない。それでも、この空間を動いていることは感じられた。冷たい空気がある。痛みは癒えないが、心地よかった。気づけば、もうここは監獄の中だった。

ここは、いつも変わらず平和なププランド。

カービィはいつもとは違い、高く積み重なったわらの上で眠っていた。

青空と雲はちょうどいい感じに混ざり合い日差しも心地よい。そよ風は涼しく、小鳥の鳴き声を運んでいる。

「うわあ、ふわふわのショートケーキだ。いただきまー・・・  
いい加減起きろ！バカが」

カービィはその声でめざめた。ショートケーキは夢の中から後もなく消えていった。

「・・・あれ？ショートケーキは？」

「何いつてんだか・・・」

「あ！僕のショートケーキ！」

「！！！？」

「いったただつきまー・・・」

「寝ぼけるなあーっ！」

オキはわらの上にカービィを叩きつけた。やわらかいからか、特に痛みを感じた様子はなかった。

「よく見てよ」

「んゝあ、えゝ・・・」

うつろとした目でオキを見た。

「えーつと・・・確か・・・」

「やっと思い出したか」

「んゝ、誰？」

「覚えてないんかい！昨日会ったばっかだろ！」

「そうだったっけ？」

「そうだよ」

カービィは少し頭を抱え込んだ。そして脳内に、ひらめきのライトがついた。

「ああ・・・思い出した」

「早く行くよ」

「あ、そうか・・・今日から・・・」

「そうだから。とりあえず早く準備して」

「あ、うん」

カービイは家へと跳んでいった。

確かに、この二人は昨日に初だが会っていた。

「あ！いたいた」

「ん？誰」

「君がカービイ？」

「そうだけど・・・」

カービイはそれを忘れていた。

「ちよつと話があるんだけど」

「え？いきなり？」

「とりあえず、家までいい？」

「いいけど・・・僕の仲間もいるよ？」

いつの間にかカービイは見えなくなっていた。

「ただいま」

「初めまして」

「！！！？」

「あ、みんなごめん。紹介するね」

カービイは自宅に就いていた。

「こちらはオキ」

「よろしく」

「誰だよそりゃ」

「未知の人を連れてこないでよ」

半球状の煙突のついた家に。

「そう騒ぐなつて」

「なんか、僕に話があるつて・・・」

「みんなも聞いたほうがいいと思う」

「怪しいわよ」

家の中で準備を始めた。

「で、何の話？」

「なにから話そうか・・・」

「早くしてよ」

「分かったよ」

準備が済んだらドアを開けた。キイツと少し音が鳴った。外は風が木々を揺らす。青空からは木々が一扫されていた。

「遅いよ」

「ごめんごめん」

「気をつけるよ」

「分かってる」

オキとカービィは森の中へと歩いた。虫の鳴き声が気持ちいい。

「くっそおおおおお！」

雷灯陰花は力にかき消された。

「03・・・お前・・・」

「鏡の国・・・既に我々のものだ」

「・・・くっ」

「諦める。今のお前に勝ち目はない」

！

鋭く上がった刃がシャドーを狙い、目で追いきれないほどの速さで近づく。

もう、逃げよう。

悔しいけど・・・

03の突きをわずかに横に動いて避け、そのままあの光り輝く現実と鏡を繋ぐデイメンシオンミラーへと飛んでいった。

現実の世界にたどり着くと茂った木々があった。葉はたなびき、音を出す。

カービィ！

ふと思いついた。「鏡の国」を救ったことのある唯一の存在を。ダークマインドをやってくれたのはカービィだったな。そう思っただけ少しふらつきながら、木に手を置いて立った。そして、道なき、泥のような道を歩き始めた。

雨上がり。

地面を踏むたびにぐちゅつと水の音が鳴る。陽射しと木陰の繰り返しで、明るいところは乾いていて、足をおくと土が少し硬い。木の根が入り組んで歩きにくい。葉から落ちる水滴が体にあたる。冷たい。

早く、伝えなきゃ・・・

「ねえ」

「何」

明るい森の中を歩いていた。特に坂など、歩き疲れるような地形はなく、いつまでも歩いていけそうだ。

「鏡の国で何が起こってるの？」

「・・・言い忘れてたね。話してもいいけど、あの方たちにはあまり詳しく話さないでね・・・。あんまり巻き込みたくないから」

「うん、分かった」

地面は明るかった。太陽から放たれた光が気持ちいい。

「鏡の国は」

ガサツ。物音がした。その音は時が経つごとに大きくなった。

「誰？」

何も答えなかった。ただ音は遠く離れていった。

カービィ

「今の、誰だったんだろ」

「さあ、影も見えなかったし何も情報ないんじゃないね」

「で、話は・・・」

「とりあえず、峠を越えた町まで行こう」

「え？峠って・・・」

「うん。目の前に見えてるあの山の向こう」

「はあああああ!？」

「じゃあ、飛んでいく?」

「うん」

そういうと、背中にあった白い、雲のようなものが左右に開いた。

とても大きな、翼だった。小さな白い羽は少しだけ飛び散り、ひらとゆれて、やがて乾いた地面へと触れた。

「さあ、乗って」

「乗ってつていいの？」

「それとも、迷子になる？」

「いや・・・」

カービィの眼中に一枚の紙切れが見えた。カービィはそれに取り付かれたように飛びついた。

「どうした？」

「・・・なんだ・・・食券じゃないのか・・・」

「タカラ クジカ？」

「えーと、そうみたい」

「ちよつと見せて」

その紙切れをオキに渡した。

「え？これって・・・」

「どうかした？」

「これ、僕の」

「は？」

「なんでこんな所にあるんだああーっ！」

オキは大声で叫んだ。

「やつと見つけた・・・」

意味が分からない・・・

「とりあえず僕の遺 保だ」

「遺産確保・・・それ、オキのだったんだ。買ってるんだ？」

「いや、拾った」

拾った!?

「とにかく、ブルーブラウンにいこう」

複雑な表情で話した。嬉しそうな気もするが、いらだつてい折る気もする。そして気になった。ブルーブラウンという町。カービィは尋ねた。



「今から行く町の名前。由来は知らないけど、ブルーは池・・・つ  
まり水で、茶色は木、根のことかな、そんなこと訊いたことがある」  
「歴史なんて興味ない」  
「あ、そうですか」

## #1 目覚め(後書き)

始めの方の敵に当たるのは。雷灯陰花はオリジナルの攻撃。

## # 2 目

「しかし鏡の国っていわれてもな」

クーは壁に腰を下ろして話した。壁は緩やかな曲線を描いて、柔らかい羽がゆったりと形を変え、傷つけることなく包んだ。窓の光がクーを明るく照らす。

光と影の演出が空気を和ませるが、今カービィの家にいる仲間たちは真逆の空気へと変えていった。

鏡の国？そんなところ、カービィ以外行ったことがない。オキから訊いた話に、鏡の国は出てきた。しかし、その国の詳しいことなど誰も知らない。一体どうしろというのだろうか。カービィはオキと一緒にどこかに行ってしまった。

そしてオキは言っていた。0に似た、さらに凶暴であり強い者。その強さは想像もつかない。0たちにさえも苦戦した。・・・となると。

「03のことか？」

「いや、違うと思う。オキが言う特徴と一致しない」

「そうよ。あれは03じゃない」

オキの語る「特徴」。翼があつて、骨のような、固いものが半透明に包む。下には、蔓とは言にくい、しかし蔓のように見える。そんな物体が円状に連なる。「もとも自然に存在したものとは思えない。誰かが作ったように見える」それが何かを示している。そう思えた。

ナゴがあきれたように砂時計を逆さにした。最初の一粒が滑り落ち、続けて二粒、三粒と小雨のように砂が落ちる。少し待たないうちにそれは滝となった。しかし砂時計のガラスには誰の顔も映らない。唯一映っているのは茶色い平地に砂の雨を降らせたナゴだった。取り付かれたように見ている。

「おいナゴ」

「もう疲れた」

小さな大地に降りしきる雨を見ていた。時間は忘れ去られて過ぎていく。やがて最後の一粒が落ちた。祖など系の上に雨粒が落ちた。

「雨・・・降ってる？」

「まあ、少しだけは」

雨の降る音も聴こえず、窓の光は曲がっている。リックは外を見た。青は雲の間から少しだけ顔を覗かせていた。

「わー雨だーっ」

「あっ、騒ぐな、落ちる！」

「雨に濡れるのヤダ」

「我慢して」

カービィは静かに舌打ちをした。小さく響く雨は降り続く。

「まだ着かないのー」

「峠越えたばつかですけど」

「峠の向こうってどこ」

「もう少しで見えるから」

「どこに」

「あつちに」

オキその方向を指差した。真正面。

そこには青々とした森林しか見えない。

あの町はどこにあるのだろう。

あの町はまだ遠い。

「う、うわぁ」

オキは急に上昇した。

「ほら。あっち、見える？」

「ん、あ、あれ・・・遠い・・・」

あの町はとて小小さく見えた。小さな湖の中に、その町はあった。  
池・・・？」

「あれは湖だけど、『フラス池』って名前。ブルーの意味がそれだとか」

「へえ」

フラス池の水が雲間から漏れる光を打ち返して眩しい。小さな楕円を形造るその湖は影を森に逃がしている。

「シャドーを見つけたぞ」

「よし・・・」

「では、行ってくる」

「待てダークマター。私ひとりで行く」

「そうか、気をつけるよ」

「ああ」

「！！・・・アイツは」

「どうしたの？」

「03だ！」

「はあ!?!」

オキは懐から小さな木の棒を取り出した。そしてその棒に無数の白く小さな粒が引き寄せられていく。棒は次第に長くなり、身長2倍、3倍、そして4倍になって、先端には三角形のそれぞれの辺が、内側に曲線を描いたものが3枚、鋭く雨を刺す。フワツ。

風？

気づけば、03はすぐそこにいた。

「くっ・・・」

「ほう・・・」

03はオキを弾き飛ばしたカービィも飛ばされた。オキは翼に風を集め、器用に空中で動きを止めた。カービィは森の中へ落ちていった。木の枝に引っかかり、水をかぶった葉をちぎり、水滴が飛び散り、水と混ざり合った土に落とされた。雨と水滴がカービィを襲

った。柔らかい地面は、落下の衝撃を抑えた。

「カービィ！」

立った。飛んだ。森という傘を抜け出して空へと舞い上がった。ついさっきまでの表情がどこかに消えてしまった。

「貴様・・・確か」

「03・・・なんでここにいる」

「それは後になって気づく。まあ、貴様が現れて好都合だが・・・」  
オキの脳に暗い電気が走った。そのように見えた。

あの笑顔は霧に隠されてしまった。

カービィは少し手を震わせ、疑惑の目を03に向けた。

「・・・カービィモか」

03の目を焦点に光を集めた。ほんの数秒、目を止めて、下に視線をそらした。小粒の雨はパラパラと降り注ぎ、緑に澄んだ森を湿らせる。数分前に自分が落ちた場所には暗く、冷たく、小さな黒い点がただ一つポカンと開いていた。葉が緑の波を作る。波の途切れるその穴にこの小雨が集められていくように見えた。

「0・・・3・・・」

「カービィ。一言言っておくが今からお前も殺る。覚悟しておけ」  
「くっ・・・」

足がくすんだ。少しバランスを崩した。左足が傾き、左目を一瞬とじた。すぐに立て直したが、なにか、恐い。

嫌な未来を感じる。

雨足は弱くなる。

雲は晴れない。

？

不思議だ。

なんなんだろう・・・この感覚。

「なんなんだろう・・・この感覚・・・」

誰かの声は聞こえた。カービィの気配もした。そして誰かが落ち

た。そこにはまだ湿った砂埃が立ち込めてどうなっているのか、はつきりつかめない。彼はただ、歩いてきた。深い傷が足を動かすたびに痛む。辛い。一体どこまで歩くのだろうか、一体どこにいるのだろうか、誰も知らせてはくれない、教えてくれない。

なんなんだろう、この感覚。

「!?!」

03の姿が、空に残像を残して消えた。その残像はただ一つ、そこに浮かんでいて、すぐに景色と混ざり合った。

「どこだ!」

「後だ……」

「くっ……」

03の動きは想像よりはるかに速かった。背後を見て、03が、光をまげて。

「死ね」

速い!

武器を目の前に振った。みつつの刃が03に向いた。しかし03はためらいなく近づいてくる。羽を大きく動かして、武器を体の横に振り戻し、両手で、03をきろうと、風を裂いて突き進んだ。そして、距離がわずかになって。

何かが、はじかれた音がした。その力を少しだけ感じる事ができた。だが今は、カービィを探さなければならぬ。でも近くにいるはずなのに、近づけない。

なんなんだろう、この感覚。

衝撃波に押されたそれを見た。僕も戦わないと。そう思った。なのに手が震えている。体が動かない。動かせない。

なんなんだろう、この感覚

湿った砂埃が立つ。視界が狭くなる。

目がかすんでゆく。

森林が何かを伝えている。

なんなんだろう、この感覚。

「甘いな……」

「……強い……」

03。やはり強い。目では追いきれない。オキは弾かれて、森林の上を一直線に空間を描いた。また翼を使い、勢いを止めた。反動も抑えきつてから、姿勢を戻し、一度目を閉じて03を見た。何も感じていないように見える。

しばらく誰も動こうとしなかった。ただじっと互いを見ているだけだった。

ここは、戦慄の地。



### #3 フウVS03

「ナゴ、何してるのよ」

「え……あ……これ……は……」

チュチュがナゴに問いかける。ナゴは筆筭を探っていた。雨はやんでいて、探る音は良く聞こえた。

「もうみんな帰ったのよ。カービイが行ってから5時間経ってるし、今3時だし、ナゴは1時に帰るって言ってなかった？」

「ア……ゴメ……」

「!……それ」

「あ、バレタ」

「出てけー!」

「ぐはっ」

ナゴを思い切り蹴飛ばした。ドアをいびつな形で突き破り、目の前の平坦な草原を転がっていった。

「ふう……迷惑したらありゃしない」

「カービイよける!」

「……」

カービイはその場から動こうとしなかった。表情が暗い、怖い。

「くっそお!」

彼の目前へと急いだ。03の力が近づく。

なぜ、よけなかった。

武器を大きく目前で横に振った。力は弾かれ、断ち切られ、

何か、恐いんだ。

03を見つめ、空気は再び重くなる。

その重力を断ち切って、オキは03に突っ込んだ。まだ落ち着いている03は全くとして動こうとしない。ただ、向かってくるオキを見て、じっとしていた。

「早く消える！」

「フツ・・・貴様ら如きが私を潰せるとでも・・・」

だんだんと距離は縮まっていき、刃の先が当たるところで振り始めた。刃先がわずかにその白い体を掠めた。しかし、予想していたとおりはその体に押し飛ばされた。03から遠くなる、その寸前まで振り続けたでも、間に合わなかった。わずかに傷ついた箇所からは、赤く冷たく血が流れ出ていた。

戦わないと・・・

「私の体に傷をつけるとは・・・やるな」

戦わないと・・・

「強い・・・」

僕も・・・

「だが終わりだ！」

「！！」

！！

さつきより速い。03は本気で僕らを殺そうとしている。僕らも本気の殺意。

「カービィ逃げろ！」

でも・・・

「早く！」

動かない。

オキはカービィの前に出て守ろうとした。しかし遅かった。刃を向ける隙もなく03に弾き飛ばされた。

！！

「死ね」

体が動かない。

何が起こった？

どうしてだろう・・・

気づけば03の姿は小さくなっていった。そして、誰かに助けられている。

「カービィ・・・どうして逃げないんだ・・・」  
僕は

「まだ、死なないか・・・」  
さすがに今のは死ぬと思った。力が倍以上に違っていた。

「カービィ・・・」  
「・・・」

「カービィ・・・今どうなってるんだよ・・・」  
この森の湿った土に立ち止まった。

さつきからずっと大きな物音がしていた。それがなんなのか見当  
がつかない。

雨は止んでも、不安は止まなかった。

俺はこんなところで何をしているんだ？

「次こそ死んでもらう」

僕は

「カービィ、逃げ」

「擬静！」

「!?!」

体が動かない。

「これは・・・」

「私が貴様らを縛った。これでもう動けない」  
ここで、死んだら

「失せろ！」

細く鋭く尖ったものが投げ飛ばされる。僕らは動けない。どうす  
る？そんなことを考えているうちに、素早く近づいてくる。

僕は

終わりだ。そう思って、ゆっくり目を閉じた。無理矢理にでもこ  
の縛りを解いてやろうと思った。でも、無理だ。

こんなところで

何も見えない、暗い。  
カッ。

終わった。

「誰だ！」

03?何を言っているのだろう。もう僕は

「・・・オキ、目を開ける」

「・・・？」

「姿を出せ・・・誰だ」

「・・・フウ？」

「オキ・・・縛りは解いた。早く行け」

「でも・・・」

目の前には茶色い壁があった。これが03の攻撃を防いだのか？

「早く行け。ここは俺がやる」

「う・・・うん」

流されながらも頷いた。オキはプラス池に向かって動いた。

フウ・・・頼んだ！

猛スピードであの池に、飛んだ。

「逃がすか！」

「深成鬼流・・・」

細長く大きい針のようなものをあの壁から抜いて、オキとカービイに向けた。そして、投げた。しかし、

「!!!」

「困るな・・・」

また、茶色い壁に止められた。

「貴様・・・」

「あいつらに手出しされちゃ困るね・・・」

茶色い壁の後から顔を出した。

「お前の相手は・・・俺だ！」

フウの頬が少し膨れた。

「何のつもりだ・・・」

「古胡竜！」

「!?!」

竜の形を彩った炎がフウの口か吹き出された。速い。

「だがそんな攻撃、私には通用しない」

「・・・フツ」

フウは無言。03は古胡流の速度を超えた速さでフウの横に回りこむ。

だがな。

「雷隼！」

「!?!」

03・・・より速い。

ありえない。そう思ったまさか私が。

「遅いな・・・」

作戦を練る間もなく、フウが後にいた。通った跡に残像もなににも残っていない。「一つ言っておこう」

何があるかと、わたしの勝ちだ。

「スピードだけじゃ私を潰せない・・・」

フウは真顔で聞いていた。全くの無表情で。硬い？いや、そうでもない。フウは口元を緩めてニヤリとあざ笑った。顔の形が変わったと、分からない程に。そしてこう囁いた。「それは、どうかね」

・・・なめやがって。03の心の奥底に少し悔いが現れた。そしてその悔いはすぐに音となった。

「なめるな！」

また、フウは笑った。お前なんぞすぐに潰せる。そんな顔だった。03は今出せる最高の速さで、フウへと飛びついた。一瞬だ。目では追えない。しかし、そのはずが。

この速さで、ぶつかれば・・・。

フウは、わずか上にかわしていた。

「・・・それは、俺の台詞だ」

「まさか・・・」

カービィの気配が、なくなった？

どういうことだ？

何が起きてるんだ？

どうなってる。

ずっと森の中を歩いてきたシャドーには何が起こっているかなんて、分かるはずもなかった。ただ、声と、爆発音と、それと。今は、カービィを探さないと。

「確かにお前のスピードは目で追いきれない。ま、俺のほうが速いけどな」

「雷隼か・・・どうやった」

「雷隼だ」

「・・・どういうことだ」

「お前に語る必要はない。・・・ここで消えるお前にはな」

「そうか・・・なら」

次は白い光を一つしかない目の前に集め始めた。丸く、大きく、膨らんでいく。

「エネルギー波か？」

「・・・見破るのが、速い、か。だが、気付いたところで何になる」

「俺はここから動かずにそのエネルギー波を止める。試してみたいこともあるしな」

「フツ・・・そんなこと」

自信の身体と同じくらいになった程の時。

「できるものか！」

白光はフウに飛んでいく。フウは動かない。手を、前に出した。

「漏角・・・」

03。

フウ。

白光はその場から動かないフウに近づくと、

無理だったな。

「満成！」

白い光。それに対して青い光が見えた。雷のように、空气中を真直ぐに、曲がったりしている。青い光は白い光にぶつかった。白い光は勢いをなくしていく。その眩しさに耐えながら、二つの光を見続けた。

まさか。

勢いがなくなっていく。このままだと打ち消されてしまう。

まさか、止められるなど……。

青い光は一瞬の強い閃光を放った。目が焼けそうなほど眩しかった。青と白、二つの閃光が混じって、そして。

「何!？」

「まだ、弱いな」

白い光はなくなっていた。

「だから言っただろ」

フウはかなりの自信で口を動かす。

「俺を、なめるなど……」

「……キサマ」

「次は俺の番だ」

「コイツ……」

ふっ。フウは上へと舞い上がった。いや、上だけでなく、不規則な方向に高速で動く。残像は見えない。

「速いな……どうする」

「もたもたしても遅いぜ！」

「!!!」

いつの間後に。そしてフウの右手には何か、赤かオレンジか、そんな色をした球体が回っていて、空気の渦を作り出している。

「恒燐球！」

かわしきれない！

かなりの至近距離だった。

あの渦が03にあたった。球は03の身体を変形させながら、回転させながら、飛んでいく。

「ぐおっ！」

「弱いな・・・やつぱり」

森へと、森林へと、あの渦巻く球に押し飛ばされていく。

コイツ！

その勢いは弱まることなく、森林の中に叩き落された。その勢いで5、6本の木が折られた。さらに、恒燐球の衝撃波が木々を傷つける。

ドッ！

「！？」

もうかなり歩いている。

「あれは、03？」

大きい爆発音がした。

なあ、一体何が起こっているんだ。カービィ。

「ぐっ・・・ゲホッ！」

「さあ、諦めるか？」

私が、こんなところで・・・

「うおおお！」

不意に起き上がり不意に飛び立った。03の目線はただフウにある。

「諦めの悪いヤツだ」

「！？」

フウは口から、光る粉のようなものを吹き出している。

「随分となめてやがるな！」

「03・・・お前は分かっていない」



「何？」

かなり落ち着いている。右へと逃げた。

「その身体の傷をな！」

「なんだと!？」

ある程度の距離で止まった。

「よく見る……」

「!?!」

キツ！小さい音、何かの音がした。03の目は音のした場所に向いている。

切り傷？

そして

「そのまま動けると思っな」

あの小さい何かの音が大きい音へと変わり、それも連続して鳴り続けた。

03の身体からは、数え切れない傷と、血が流れ出していた。

「うっ……」

「さあ、どっする」

「クソが……貴様如きに……」

「そうか……なら」

恒隣球。

「死ね！」

「!?!」

ヒュー……。

あのクソ野郎が！

スウー……。

「逃げるのか？」

……!

「ま、どうでもいいけどな」

チィ……

スッ。

03は、そこから消えた。

恒燐球は、徐々に小さくなって、消えた。

「逃げた・・・か」

## #4 オレンジ色

オキはこの森林の上を飛び続けている。

ブルーブラウン、フラス池はすぐそこだった。

傷が、痛む

カービィは気を失っている。

「ぐッ！」

あと少し、あと少しで町なのに……。

ちょうど、湖の端を通過した。

もう、飛べないや。

オキの羽の動きが止まった。カービィを掴んだままフラス池に落ちていく。

もう少し、なのに……

バサッ……

僕は……

プウン……。森林の木の幹に何重にも円が広がった。波紋の中心から丸い腕が見えた。シャドーは「誰？」と問いかけたかったが、今ここで、他の知識を吸収しても何も得られない、そう思っていた。たとえ関係があったとしても、声を出す気になれなかった。何かの生物の動きは止まったが、波紋は広がり続けて、シャドーの目をそらすようにする。しかしシャドーはある一心で、波を避けた。

鏡の国は俺の国なんだ……

「大丈夫か……」

なんだろう……あたたかい……

「カービィもいたのか……」

どうなったんだろう……

そして、目の前が明るくなった。空が見える。

「目が覚めたか・・・」

「え？」

振り向いた。

「ダイナブレイド・・・」

「じつとしてるよ。町の前まで運んでやるから」

気がついたら二人ともダイナブレイドの背に乗っていた。羽が体にあたってくすぐったい。でもあたたかい。これで傷も癒えそうな気がした。カービィは気を失っていた。でも気持ちよさそうな空気を流している感覚がした。

「ほら、もうすぐつくぞ」

オキは頷かず、フラス島を眺めた。湖の上にかかるたった一つの橋と島の継ぎ目を特に念入りに眺めた。

そして足をトンと鳴らして、フラス島の入り口に降りた。翼をたたんだ。羽が少しあたりに散った。

「ついたぞ・・・」

ダイナブレイドは背を低くした。

「うん・・・ありがと・・・」

足を動かした。カービィの手をとって。

「痛っ！」

「そうか、まだ痛かったのか」

ダイナブレイドの傍にたくさんの人々がいた。オキはこの人々に手を引かれ、カービィは誰かに背負われ、町へと入っていった。

フウは軽く一息ついた。両足は湿った土の上にあった。体をブルブルラウンの方向に向けて、何もなかったかのように歩き出した。

「さて、さっさと帰るか」

木の幹に、波紋が流れていた。その中央からは誰かが背中をのぞいていた。

「アイツは03より強い・・・か」

誰か、は再び波紋を強くして、木に吸い込まれるようにどこかに

消えてしまった。

「カービィ、何処にいるんだよ・・・」

木の葉が風にゆらされてゆさゆさ音が鳴る。妙だ。妙な感がシャドーを襲った。もしかしたら、カービィに会えないまま・・・心が、乱れる。

どこに、いるんだ。

フウは森林の上をなだらかな風に乗っていた。木々の葉は風になびきカサカサと音を立てている。

「あいつら・・・ちゃんと帰れたかな・・・」

二人はもう見えない。フラス池と町はくつきりと見えていた。小さいながらも遠くからはつきり見える。あの中央の高い塔とその周りに立ち並ぶ屋根の平らな木製の家がなだらかに連なっている。フラス池に浮かぶ中央の島と外側岸を結ぶ橋は何の変わりもなく直線を描いていた。

「さつさといくか・・・」

速度を上げて、追い風を横に押しつけながら、ただフラスの町へと向かった。降っていた雨の跡がわずかながら残っていた。今は雲がどこかに去って少し赤みがかかった青空が顔を覗かせていた。

「痛ッ！」

「あつ、すみません」

オキとカービィはただ一つの小さな病院にいた。白くのびた包帯がオキの腕を包んでいる。

「つたく・・・無理すんなって、フウも言ってる」

オキは苦笑いした。

「だって・・・」

「ま、お前だからしゃーねーか！」

「あつ、それ以上言ったらただじゃおかないよ！」

木製のベッドの上で急に起き上がった。布団をめくり上げ、投げ出すように。

そして急に冷静な表情へと戻し、問いかけた。

「で、カービイは？」

「ああ、あいつか・・・泡吹きながら気絶してる」

「それ気絶か？」

「らしいな」

何か違うこれは気絶じゃない気絶じゃないんだってばどうも食い違うけど気絶じゃない違う絶対違うなんか診断ミスってるミスってるんだって今更なに言ってるんだ僕は気絶だろうが失神だろうがどうでもいいものを何にしているんだもう何がなんだかわかんなくなってきたよ余計なことしやがってあのヤローなんかわけわからんことになったじゃないか

と、オキは自分に言い聞かせてみた。今更何を、と思ったが今ここで気絶やら失神やらと迷っていてもしょうがなかった。おそらくほぼ無意味だろう。今何を感じようと無意味だろうと、頬を緩めた。少し笑みを浮かべ、安心したかのように表情をつくった。

傍にいたバイオスパークは僅かに笑った。窓の外の風鈴が綺麗に鳴り響いた。音は室内に響き渡り、少しゆがんだ心を癒した。

「おっと、そろそろ行かないとな」

「え？どこに？」

「橋島口。多分だがもうすぐフウが帰ってくる」

「フウ？・・・完全に忘れてた」

「お前ホントに友達か？」

「いや、その、アレで頭いっぱいだったから」

「嘘だろ」

「ハア！？」

「なんてな、じゃ、行ってくる」

バイオスパークは開いていた窓から跳びたつた。

「じゃあな」

「ちゃんとした出入り口から出る！」

・・・ハア、アレといるとずっとこんな調子かぁ・・・。

「着いた着いた」

フウは軽くため息をついた。巨大な森林を抜け、フランスの手前、橋岸口にいた。

「あ、みつけ」

「バイオスパークか、ってかさつきまで病院いたよな」

「何で分かったの」

「包帯持つてるから」

「包帯・・・あ、いつのまに・・・」

「で、オキらは？」

「今病院にいるさ・・・カービィは泡吹きながらふっ倒れてるけど、それ失神か、とフウは思った。

「で、オキは？」

「この『で』星人め・・・ベッドでゆっくり起きてるよ」

「今何星人ていった？」

「いやなにも」

「へえ・・・そうなんだ」

「ギク。」

フウはバイオスパークに飛びついた。バイオスパークの背に乗ると地面に強く押し込んで、腕を強く引っ張った。

「ちよ、やめて、オイ、フウ！」

「この黒坊主が！」

「すすすません許して、ねえ許して」

「ごき、と小さい音がなるとフウは背中を降りた。

「あゝ痛・・・相変わらずのストイックだな・・・いやキレ症か」

「もう一度されたいか？」

「いやマジすいません」

バイオスパークは土下座をした。

「戻るぞ」

「そうですね、コノヤローが・・・」

何かコイツいると腹立つんだよな、とバイオスパークは思った。

フウは橋の中央にあった一箇所の砕けた場所を見て立ち止まった。

「どうした」

「いや、なんでもない」

森林に響いていた雑音はどこかに消えて、今は風に音が静かに聞こえていた。

なあ、どこにいるんだ？

救世主を探して、歩いてきた。突然咳き込むとそこに手を突いて座り込んだ。目線の咲には吐き出した血が点々と散っていた。木の陰になりまだ湿っていた土に赤色が滲んだ。雑草にも、少し粘り気のある赤い水滴がついていた。

少しの時間そこを見ていた。

顔色は少し青ざめていた。

暗かった。

空のオレンジ色は少しむなしく見えた。雲はそのむなしさを覆い隠すように膨らんだ。しかし、その雲もむなしい。暗い灰色に染まる雲は少しながらも雨を降らせていた。数時間前の雨が戻ってきたようだった。ポツポツ、ポツポツ、広大な森林を濡らしながら。

ここにいます。

声が聞こえた気がした。何もない場所から呼んでいる。幻となつているのか？意識がもうろうつとしてはつきりとつかめない。

遠い。遠い。見えない。届かない。遠い。

ここにいます。

オレンジ色のはずの空はすっかり雲に隠されていた。雨粒はだんだんと増えていく。淡く、冷たく、シャドーの体を濡らしていく。下を向いたまま、誰かを待ちながら、たった一人で、たどり着いた知らない森の中で、あの人を追いながら。



空の色は、

森の色は、

オレンジ色は、

雨の透明にまぎれている。

雲の灰色に隠されている。

悲しみがこみ上げてきた。しかし涙は流れてこない。かわりに雨が、地面を見ている目に溜まり、涙のように落ちていく。

どこにいる？

雨は激しくなっていた。

「見つけた」

水滴を切って散らすように、どこかで聴いたことのある声が響いた。

嫌な予感が強くなった。目的以外は見たくない。

ディア・・・クス。

ぼやける。見えない。近い。遠い。届かない。黄色く透けている斧のような刃が振り下ろされるのだけは、くつきりと見えた。

探しきれなかった。

見つけられなかった。

救世主を。

どこに？

ほんの一瞬だった。深い切り傷から血が飛び散っていた。雨がそのしぶきを叩く。

曇り空。

視界がぼやける。森が見えない。

夕空。

辺りは既に暗く、日は沈みそうだった。

視界も暗くなる。

暗くなる。

見えなくなつた日が沈むと、シャドーは目を閉じた。

雨は降り続けている。  
空は暗かった。

「雨、降ってきたね」  
フランスには珍しい大雨だ。窓ガラスに大粒の水滴が音を立てている。

「無理しやがって」  
「だって・・・」  
「言い訳はいい」

部屋に灯された光がほのかなあたたかさを届ける。外の雨とはマ逆な雰囲気を漂わせていた。すっかり暗くなった空はよりいっそう中の明るさを引き立てた。

「で」  
「なんだ？」  
「足踏むな・・・じゃなくて足に座るな」  
「いいじゃん別に」

「よくないよ痛いよ」  
「痛いか？」  
「痛いわ」  
「ならどっこい」

「偉そうにしないでよね」  
「いいじゃん別に」  
「よかないよ！」  
「チッ」

「舌打ちしないでよ」  
「アホ」  
「ねえ！」

「そっぴやカービィとかいうやつはどうした？」  
「寝たって」

「気、失ったまま持続してるだけじゃないのか」

「違うつばい」

「なんかムカツクなああの青忍者」

「ってバイオが言ってた」

「やっぱそいつか」

蛍光灯の電源を切った。

「処理してきたぜ、ディフェクト様」

「よくやった、ディアクス」

「そりゃもう倒れてたんだから楽勝だったさ・・・それで、何でオイラに？」

「一番近くにいたのはお前だったからな」 「一番近くって・・・」

シクルとかじゃダメなんスか」

「シクルは尾行役だ、戦闘タイプじゃない」

「じゃあ のヤツで」

「ヤツは03を潰したのを暗殺するよう頼んでいる」

「そうなんスか」

## # 5 鏡の国

「朝だぞ」

眠っている。

「朝だぞ」

眠っている。

「起きろああ！」

「痛ったああ！」

ハリセンを強く振り下ろした。オキはベッドから突き落とされた。ベッドに手を乗せた。

「そのハリセンどこにあった」

「置いてあった」

「なんでハリセンがここにあるの」

「知らん・・・いや、なんか書いてあるぞ、えっと・・・Baio spakより」

「あのときにおいていったな」

「いいんじゃないか？」

「黙れ！あの忍者張り倒してくる！」

昨日と比べると元気はよさそうだ。傷の痛みもほとんど残っていないだろう。

「分かった分かった。それと家に帰っていいらしいから帰るぞ」

少し苛立ったように返事をした。

「あ、雨止んでたんだ」

伝統からたれる水滴が窓の前を落ちていった。白く澄んだ光が部屋の中を照らす。

「じゃ、行くか」

「ちよ、ちよっと待って」

「なんだよ、動けるんだろ？」

「いやそうだけどさ」

フウは廊下に出ると、目を一瞬鋭くオキに向けた。

「ちよつと待ったー!!」

「なっ」

「もしかして・・・?」

カービイはフウに飛びながらけた。少し前に飛ばされたフウは少し赤かった。

「カービイふつかーっ!」

「やっぱり」

「オイテメエ」

「・・・ご、ごめんなさい」

嫉妬深い表情でカービイの後ろに立った。

「いや、まあ許してやってよ」

「張り倒すぞ」

「ごめんなさい」

病院の出入り口となるドアが開いた。

「暑っ!」

雲は点々と浮いていたが、太陽の光はとても強かった。陽射しは地面を温めて、さらに気温を上げている。

町の中央にある塔はいつになく輝いていた。

あの照明は町を包んでいた。眩い光は線となって目に映る。

「何でこんなに暑いんだあ・・・」

「早く帰ろ・・・死ぬ・・・」

「暑い?」

「お前黙れ!」

オキとフウは口を揃えて言った。カービイは驚き、冷や汗を流した。

そして黙ったまま、塔の方向に続く道を歩いた。木製の家が立ち並び、明るい茶色が体を刺激し、空気を少し重く、しかし涼しく感じさせる。

「ねえフウ」  
「なんだ？」  
「そろそろあの塔の名前を教えてよ」  
「もちよいつまづいてもいいんじゃないか？」  
「いやホント教えて」  
「知りたいか？」  
「知りたい」  
「じゃあ教えよう。名前は・・・ない！」  
「ハア!？」  
「だから言わなかった」  
「嘘だよ」  
「これは真実だ！偽りはない！」  
「黙れ！」  
「ま、いつか」  
「・・・オキ」  
カービィは言った。  
「ブルーブラウンの意味、合ってるの」  
「だからそれは訊いたことのある話！それとブルーブラウンはこの町じゃない」  
「え？じゃあこの町の名前は？」  
「『フラス』だ」  
「めんどくさいなあ」

フラス池に架かる橋の近くに、何重にも円が広がった。水面に反射した光が複雑に方向を変える。橋を歩く人々はおらず、橋島口に常にいる案内人は夢の中に入っているようだった。誰の視線も浴びずに、湖は静かに揺れていた。再びその波の中心から、何かが出てきた。

そのすぐ横から、透き通った水のような、球体をした、波紋の中心から出てきた生物と似た姿をしていた。波紋の球体生物は水の球

体生物に話した。

「ここだ、ランス」

ランス、という名の生物は喋らなかった。口といえるものはなく、話すのは無理そうだった。

ランスは再び湖に溶け込んだ。その球体の姿は水と同化してして、全く見えなくなってしまうた。

「さて、戻るか」

今度は複数の円が球体生物に集まっていく。そこから彼は水の中に沈んでいくように消えた。

「座れ」

フウとオキの家は中央の塔の少し近くにあった。窓からは高い塔が、並ぶ民家の上にそびえる。

「で、何の話？」

「もう忘れたの？」

「うん」

「殴るぞ」

「ごめんなさい、今思い出すから」

「鏡の国だよ」

「あ、そうか」

しっかりと整理されていた本棚の上においてあった丸い時計がチクタクと音を立てて数字の列を回る。秒針が一つ進むたび、音が部屋中に響き渡った。

「オキからだいぶきいたる？」

「うん」

「今からそれをもっと詳しく話す。よく聞いておけ」

今から長々と面倒な話が始まるのか、とカービィは思った。カービィの目線はフウに向き、退屈そうなふりをしていた。

「オキ、紙とペンとつてくれないか」

オキは立ち上がると、すぐ後ろにある机の上においてあった小さ

いメモ帳と鉛筆を取った。すぐに戻って、その紙とペンをフウに渡した。

「よう嶺森林って分かるか」

「どこそこ」

「この周りの森林のことだ。あと、ディメンションミラーって分かるよな」

「確か・・・鏡の国に行くための？」

「ああ、そのいディメンションミラーなんだがな・・・」

「ププランドにあるやつはどうもなかったけど」

「へえ、よかったあ・・・」

「ま、一安心したな」

「え？何が？」

「これから分かるから」

「えー」

「ほら、きけ！」

机上に置いたペンが揺れた。木目と線が踊っている。

「まずあの鏡についてだが」

「あの鏡って？」

「ディ」

「メンションミラーか」

「腹立つなお前」

話し声が窓に触れる。真っ白な紙にフウが持っていたペンが触れる。小さな黒点がついて、その紙は意味のあるものへと変わっていく。そこに記される文字は繋がって、一つの文章へと成り立っていく。文字だけでなく、矢印や簡単な地図が描かれ、その紙の中に新たな時間と空間を作り出していく。

「ざつとこんなんだろ」

「話は？」

「書きながら話しても理解できないだろ」

「うん」



「うんじゃねーよ」

カービイは記された文字に目をやった。少し複雑な気もしたが、ちよつと考えるとそれは簡単に見えた。

「いいか、今から真面目に話すぞ」

オキとカービイはコクリと頷いた。外の音は全く聞こえず、中は静まり返っていた。「鏡の国はなくなった」

フウの突然の発言に、カービイは呆然とした。まさか、あの国が？オキとの話では、まだ消えていないといっていた。

「落ち着け、鏡の国自体がなくなったわけじゃない」

安心した。でもどういうことだろう。誰かに支配された、間では聞いたと思うが、どういうことだろう。

「・・・きいたよな」

「？」

「きかなかつたのか」

「ああ、あれか」

「が鏡の国をのつとつたんだ」

「のつとつた」

フウは頷いた。

「は強すぎる。誰一人とめることはできなかった」

「シャドーは？」

「シャドー？アイツか・・・あいつさえも止められなかったらしい。今この国にいるって言う噂が流れてたけど行方は分からない」

「分からない？」

「ああ、当然のことだ。鏡の国は支配されたんだ。どこにいるかなんて分かりっこない」カービイは時計に目を向けた。秒針は止まらず動いている。一蹴するたびに長針が動き、ちよつと十一時になった。

「あと、そのことがここにどんな影響を及ぼすか、だが」

フウの右手が動いた。ペン先は紙に導かれ、手に導かれ、動いている。

気がつけばオキは眠っていた。

「オキ！」

「やめとけ、そっとしていてやれ」

静かに時間は過ぎていく。

「続けるぞ」

「うん」

「本質的な要素はないみたいだ。鏡の国とここは完全に分離しているらしい」

「じゃあ、なんで？」

「『』だ」

「？」

「の目的ははっきりとは分からない。しかし、ここ何かを狙っていることだけは分かる。その『何か』が分かればいいんだが……」

カービイはごくりと唾をのんだ。

「は何をするか分からない。だが、俺たちはここを守らなきゃいけない」

「だったら、どうして僕を？」

「お前の力が必要なんだ」

暗く、大きな部屋の円柱形の柱から波紋が広がった。

「あ、シクル帰ってきた」

その球体生物はこの空間に全身を出した。

「ディアクスか、ご苦労」

「のヤツは？」

「今暗殺しに行ってる」

「誰を？」

「03を潰したヤツをな」

「03か……オイラより弱いのに」

「そんなのは知らないが……私は少し用事がある。もう少し見張

「つててくれ」

「分かったよ、めんどくさい」

「どういうこと？」

「お前の力が必要だ」

「だからそれがどういう・・・」

「お前の力がないと　は倒せない」

「は？」

「言っただろ、　は強い・・・お前じゃないと倒せない気がするんだ」

カービィは黙り込んだ。

「・・・分かってるさ」

「・・・え？」

「急に言われて驚いたのは分かる。お前の力もな・・・」

「でも」

「大丈夫だ、お前ならやれる」

「・・・」

「時間をかけて決めればいい・・・ここにいても、家に帰ってもいい。決まったら俺に報告に来ればいい」

「分かった」

長針が下を指した。

持ったペンが横を向いた。

カービィは玄関に立った。ドアは木製で、ちょうど目の高さになる場所には一つの絵が彫られていた。誰かが誰かと一緒にいる。そんな絵だった。瞳の中や、淡い影までとても細かく作られている。

何か不思議なものを感じていた。

ドアノブに手を伏せた。金属製だったドアノブは、夜の寒さがまだ残っているのか、少し冷たかった。そのドアノブを滑らかに回しドアを押した。夏なのに空気が涼しく感じられた。ふと左を見れば名も無き塔がたっていた。地面から青い空に向かって一本の柱を繋げている。

どこに行くかも分からないまま歩き出した。時間はゆっくりと流れる。

昼下がり。

太陽が高い。

「今日満月か」

フウは呟いた。オキはその声で目覚めた。

「あれっ・・・昼過ぎ・・・」

「あ、起きた」

「カービィは？」

「散歩するとか言っただけ」

「へえ・・・どっいう意味？」

「後で分かるさ」

持っていた雑誌を一頁静かにめくった。フウは雑誌の文字をゆっくり追いかけている。何か喋る様子はない。

オキは立ち上がり、玄関へと向かった。フウには何も言わずドアを開けた。ふと彫られた絵を見た。不思議に少し微笑み、外へ出た。フウは雑誌を読んでいた。

家の外に一步出ると、雲がかりの空が目に入る。雨は降っていない。

湖から吹く涼しい風が和やかにオキをおす。足下に生えていた雑草が揺れる。僅かにカサカサと音を立て、空へと消えていく。

商店街に行こう。

カービイは名も無い塔の前に立っていた。あの家の前から見ても高かったが、塔の真下まで来ると、もつと高く見えた。塔の一番高いところからは空に手が届きそうだ。

塔の出入り口には住民が自由に行き来していた。ここに入るのには自由みたいだ。制限する策も無く、扉も無く、行く手を妨げるものは何もない。

カービイは塔へと入っていった。何も感じず、何も喋らず。壁につるされたランプがほのかに燃えて、中は薄暗かった。目の前には階上上がるための螺旋階段がはっている。塔の中央には天辺まで一直線になっているのだろうか、まっすぐに柱が立っていた。

静かに階段に足を乗せた。この薄暗い空間の中から、何かの神秘を感じた。パワースポットなのだろうか、この空間の空気から強い力を感じる。気を抜いたら飛ばされそうだ。風のようなものが吹き降りてくる。

まるで何かに誘われるように階段を上っていった。上に何かあるのだろうか。塔の頂上にはどんなものが待っているのだろうか。見上げると、薄暗いランプと大きい柱が響きあっていた。足音以外の音は無い。外とはまるで別世界だ。空間が切り取られている。その空間を一段、一段と上っ

円形に作られた塔の橋に沿うように並べられたベンチに座った。外からの光は無く暗かったが、なんだろう。気持ちが落ち着いていく。

ここで、決めようか。

オキはフランスの商店街にいた。湖の方向にはただ一つの橋が見える。その橋の端から塔の前まで続く商店街はフランスの人々でにぎわっていた。自分の足音は周囲の声にかき消され、全く聞こえない。商売人の宣伝の声は特に大きく響き、商店街全体に届いているようだ。ここを貫ける風は人々を包む。

よく行っている売店に向かった。

数々の人だかりの中を掻き分けて進む。人気の売店に並ぶ行列が道の真ん中にまであふれ出している。度々できる広い空間もすぐに消えてしまう。

この辺かな、と思ったところで立ち止まった。多くの人々が集う中で横に向いた。かなり密集しているかといえば、そうでもないがやはり多い。所々にできる隙間から覗いて、あの店を見つけようとした。よく見えない。見えそうだが、よく見えない。

そして、そしてソ店の名前が見えたところで、道を行き交う人々を横切った。

「おお、オキか、今日は何だ？」

店主の方が先に気付いた。オキは、まだそこにいるとは気付いていないが、声は聞こえたみたいだ。その声に反応したのか、オキはその店を見た。後少しで店につく距離だったため、「あっ」と、声を届けた。店主も返事を返した。そして、その家の前まで来た。

「今日も混んでるよ・・・もう！」

「へっ・・・だいじょうぶかい！」

オキは少し汗をかいていた。さすがにこんな大勢の中では暑くなるのだろう。

「で、今日は何の用だ」

「今日はどんなのあるか見に来たの」

「ほう、珍しいな・・・手ぶらか・・・何かいつもと違ったことでもあったのか？」

「いや、何も・・・」

小さな作り笑いを浮かべた。黙ったまま店内へと入った。

「何かあったみたいだな・・・」

オキはその小さな店の中をゆっくりと巡った。置いてあった野菜を、一目見て品定めするように目をちらつかせた。

店内を一周した。

「なんだ、もう帰んのかい」

「うん・・・ちょっと用があつて・・・」

「じゃあな」

店主はすんなりと受け入れた。オキの言葉を流すように。

オキは再び人だかりの中に戻っていった。その中に流されるままに端の方向に行った。店主からはオキの姿がだんだんと見えなくなつた。つた。つた。

一端が雲に隠された太陽が厚く照っている。

商店街も熱く盛り上がっている。

オキは商店街を橋側に歩いていた。

フウは開いた雑誌を枕にして夢の中に入っていた。

時計はチクタクと音を立てて回っている。

ただゆうつゆうつと時が過ぎる。

オキは橋島口にいた。たつたまま湖を見ていた。水面に映る太陽が眩しい。光がずっと向こうまで走ってゆく。オキは木で作られたベンチに座った。

素材に触れる感覚がひんやりと冷たくて気持ちいい。

座ったままじっとしていた。目の前に映る景色だけを見て、時間が過ぎるのを待っていた。風のせいで森林はゆれ、湖は波が立ち。

光の方向は不規則になり、点々と水面が輝いていた。

じっと見たまま、じっと見たまま、

僕は何をしにきたのだろう。

ここに座っている。それが何を意味するのかは分からない。  
ここで何をしているのだろう。

目の前を蝶が横切った。その線がくつきりと目に焼きつく。  
無意味な時間がどこかに消えていく。音もどこかに消えていく。

今見てるのは夢なのか？

何も考えずに思った。なんなのだろう。

夢？

カービィは螺旋階段を上っていた。あの場所に座っていたのだが、  
階段を上る人々を見てみると、なんだかもっと上へ行きたくなった  
のだ。流れに乗りながら、塔の天辺を目指して。

階段は長い。螺旋階段。

今、外はどんな景色だろう。夜になっているのかな。

度々ある階を越えて。

時間は過ぎていく。

いつの間にか、時計の短針は五時を示していた。

「夕方か・・・」

フウは枕にしていた雑誌を閉じて本棚に戻すと、窓の前に立って  
空を見た。まだ、太陽は沈んでいないはずなのに、周囲の高い山が  
それを隠してしまっている。赤みがかった空だった。

窓の隅に溜まった埃を一息ふつと吹いて掃うと、玄関へ行き、外  
に出た。そのまま塔の方向に歩いた。

「満月か・・・」

空はまだ明るい。月は全くとして見えない。山に隠れているのだ  
ろうか。

塔の天辺を見た。

カービィは塔の天辺にいた。周囲の山が見渡せる、とてもよい光



景だ。ふもとより風があり、とても涼しい。端まで行って、塔を見下ろした。とても高い。入り口にいる人々が点に見える。

塔を作る石材に触れると、何か小さな力を感じた。この塔から感じられる力は体の中を通り過ぎていく。石材を軽くこすると、小さな音が鳴る。ざらざらとした感触。

フウは階段を上っていた。

暗くなりつつあった空と比例して塔の暖かさもなくなってくる。

螺旋階段も足を乗せると一瞬全身がこおるような冷たさが伝わる。

今は暑い夏のはずなのに。

不本意な時間が消える。

フウは塔の天辺への最後の一段を越えた。山の向こうの沈んだ、太陽からの光はほとんど無くなり、雲の灰色に染まりながら輝く無数の星が夜の湖の照明になっている。

「ここにいたのか」

夕空の一边が消えかけたとき、月は明るく二人を照らした。

「何しにきたの？」

「アレ見たら今日満月だったからな・・・別に月見るのが趣味って訳じゃないけど」

そう言うとフウはカービィに近づき、座る場所の無い塔の端によりかけた。一度、温和なため息を軽くついた。

「空って、楽しいよな」

和らげな声だった。昼とは全く違っていた。フウの素顔はこんなものだったんだ、そう感じた。

フウは何を感じているのだろう。

ガチャ。

オキらの家の扉が開いた。家の中には誰もおらず、夜の森を想像

させた。その中で音がするのは、やはり時計の秒針が少しずつ動く寂しげな音だけだった。静かに後の戸が閉まった。

町を彩る小さな光が家の中に僅かに漏れて、暗くだが、ものは見える。

フウたちはどこに行ったのかな。

「綺麗だろ、満月」

太陽はすでに沈んでしまい、代わりに丸い月が昇ってきている。

明るい。他の星の光を邪魔するように動いている。ゆっくりと、ゆっくりと。

「ここにいるの？」

「別に問題ないしな。この塔二十四時間出入り自由だし、……一晩ここにいても大丈夫だしな」

「へえ……じゃあずっとここにいるんだ……」

「ずっとかどうかは別だけどな」

フウは少し微笑んでいた。塔の天辺、この町で最も天に近い場所  
で。

満月も笑っているように感じる。

暖かいなあ。

フウを見た。

気持ちよさそうに眠っていた。

ここって。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4933m/>

---

星のカービィ

2010年10月17日18時11分発行